

同窓会50年を語る

インタビュー

フリーアナウンサー
(Office Lapri)後藤珠希
(2006年卒)

西田 博

愛媛大学法文学部名誉教授

●プロフィール●

愛媛大学文理学部人文科学科乙卒業
 大阪市立大学院修士課程経済学研究科修了
 昭和41年1月 愛媛大学文理学部講師
 昭和43年4月 法文学部助教授
 昭和63年4月 法文学部教授
 平成10年3月 定年退職

後藤：今日は、長年同窓会の活動に多大の貢献をしてくださった西田先生にお話を伺います。先生、よろしくお願ひします。

西田先生(以下、西田)：よろしくお願ひします。



後藤：ではまず、大学と同窓会の歩みについてお話をお聞かせください。

西田：同窓会は卒業生の組織です。大学のことが分からずして同窓会のことには分かりませんから、大学の動きから説明していきましょう。

戦前から1950年代までは、大学進学率は非常に低かったんですが、1970年代に入ると、短大を含めて15%以上の進学率になって、大衆化されてきました。90年代以後は進学率30%以上、現在は50%を超えています。同時に入学者が現役・浪人だけでなく社会人や外国人にまで多様化してきたので質的拡大が問題になり、それに伴う改革が必要になりました。

その1つが91年の大学設置基準の大綱化です。これはまず、教養課程と専門課程の区分の廃止。1年生のうちから専門課程の一部を履修する形です。さらに、学生による授業評価。教授の自己点検や学外の機関による相互評価もされるようになり、この評価に応じて予算配分がされるようになったので、多様化のもとでの個性化が重要になったんです。だから、最近いろんな名称の学部や学科が出てきてるんですよ。

次に92年から、大学院重点化構想というのが出てきたんですが、愛媛大学でも、できれば全学部大学院、少なくとも修士課程は絶対、という方向へ動きました。

04年からは、大学教育への自由主義原理の導入や自己採算性強化のために国立大学が法人化され、だんだん『大学の一般企業化』が進んできています。

後藤：なるほど、だんだん大学の歩みが分かってきました。では、西田先生が同窓会に関わるようになられたいきさつについてお聞かせください。

西田：まず、1959年10月に法文学部の前身である文理学部の同窓会が創立され、このときから牧野修二先生が事務局長をやっておられたんですが、20年やって自分も高齢になってきたからと引き継ぐ人を探してたんですよ。で、私が母校である愛媛大学に赴任してきたから、「やってくれないか」と。でも1年目は断ったの。しかし「母校にいるのだから、税金だと思ってやれ」と言われるとね、我々の年代には効くんですよ(笑)。しょうがなく引き受けることになっちゃったのがきっかけ。その後、母校出身の教授があまりいないもんだから「税金」が効かなくて、2000年まで20年9か月も私が続けることになってしまったんです(笑)。

後藤：一番苦労された点は「名簿の管理」「会報誌の発行」「財政」などだと思いますが、どのようにシステム化し、事務局の体制を整備していかれたのでしょうか。

西田：まず、同窓会費だけでも、これは最初、卒業時に集めることになってたんですが、なかなか集まりません。だから予算がわずかしかなくて苦労したんです。これじゃいかんということで、82年から入学時に終身会費として出してもらうことにして、これで財政基盤ができたわけです。

次に、同窓会は『同窓生の親睦団体』なんです。そうすると、同窓会名簿と会報の2本が基本の柱なんです。この名簿がないと、同期の連中がどこにいるのか、何をしているのかわかりません。しかし、予算がなかった頃は名簿がなかなか出せなくて、会報が精一杯だったんです。会費の徴収方法が変わってからは、だいたい2~3年に1回のペースで出してきました。名簿の作成は印刷会社に依頼していたんだけど、そうしたら、所有権の問題が出てきた。編集権はこちらにあるんだけど、所有権は印刷会社にあるんですよ。だから、原本を買って所有権をこちらに移しました。その『会員名簿原簿』データをパソコンに入力して行って、97年にやっと完了しました。私の発行した名簿の特徴は、産業別・企業別に索引をつけていること。非常に便利です。ただ、これ続けるには毎年の卒業生を分類しなければいけないので大変で、誰もやりたがりません。でも、学務課に行けば就職用の産業別分類の企業年鑑があるんですから、それを参考にして分類すればいいんですよ。しかしそれも大変だけど、卒業生の就職先・転居先を把握するのがまた大変。卒業直後に実家にハガキを出し、就職先で部署が決まったころにまたハガキを出す。この2回のお尋ねをするとだいぶ把握できます。

その後、私だけでは事務作業が大変なので、2000年から事務担当のパート職員を採用することにしました。それと電話とFAXの設置です。国立大学だから、当然、施設は国有ですよ。そうするとね、電話線を引く穴を壁に開けることに許可が出ない。同窓会が建築費を半分寄付して建てた朋友会館内の事務室なのにね。電話の設置に10年かかりました。苦労しました(笑)。こういう風に事務局が整備されていきました。

後藤：ずいぶんご苦労されたんですね。今の同窓会があるのは西田先生の功績が非常に大きいことがよくわかりました。では、次に支部活動について伺いたいのですが。

西田：関西支部、関東支部はそれぞれ昭和37年と40年に設立されて、活発に活動しています。最近、四国支部が作られました。ただ、九州支部はまだありません。九州にも卒業生はたくさんいますから、これを作るといのが検討課題でしょうね。

後藤：今後の同窓会の活動についてですが、若い世代の参加、財政の活用、校友会との関係などの課題については、どうお考えですか。

西田：私学は学部ごとの同窓会がなくて、全学で1つの同窓会なんです。国立でも10年ぐらい前から一本化へ向けて動きが出ています。法文でも、卒業生から一本化への希望が出てきているんですが、歴史的経過が違うし、財政も違うから、そう簡単にはいかないんです。しかし、かつて同窓会連



合会を作ったことがあるんですよ。朋友会館(職員会館)を建てるために募金活動をする目的で、全学で協力してね、そのときに集めたお金が少し残ったんです。このお金を基にして同窓会連合会を作り、90年に規約ができました。結局いろいろな問題があって、後にこの連合会は解散したんですが、今でも会長会というのが各学部同窓会の連携をとる機関として残っています。校友会はありますけど、これは各同窓会と大学との共通窓口としてあるだけだから、同窓会が一本化されてるとは言えません。校友会は校友会としての役割があるんですから、それとは別に各学部同窓会が一本化すればそれなりの対応ができると思いますから、その点が課題です。

学部への支援活動ですが、学部から求められたことに協力するのもいいですが、同窓会も独自で何ができるか考えなくちゃいけませんね。「同窓会=(イコール)学部」じゃないんだから、連携するところとしないところの在り方を検討しなきゃね。それから、他大学の同窓会とも交流をもって、地域の同窓会として地域社会への貢献についても考えたらいいと思います。

若い世代がなかなか同窓会活動に参加しないのは、同窓会の宿命みたいなものでね、しょうがないと思いますよ。卒業して10~15年ぐらいたって初めて大きな仕事を任されたりして、同期や先輩とのつながりを求めてきたり、ちょっと仕事に余裕が出て後輩の面倒を見ようという気になったりしてね、同窓会に関心が向いてくるんです。だから、卒業したばかりの若い人を引き入れるのは難しいです。特効薬はないと思います。それより、名簿管理に力を入れるべきですよ。個人情報の保護には十分気をつけなければいけないですが、同窓会の存在意義として名簿は絶対に必要ですから。

財政については、きちんと会費が徴収されるようになって基盤はできましたけど、貯めるばかりではいけないですね。会員のためにどう使うかも考えないと。来年の同窓会創立50周年記念には、大々的に使ってもいいんじゃないですか。記念の50年史も出してほしいですね。

後藤：ご意見、ぜひ参考にさせていただきます。本日はお忙しいところお時間をさいいただき、ありがとうございます。

